ユネスコスクール活動事例集

第 7 集

愛知県

愛知県教育委員会

目　次

特集 ESD活動支援・協力団体紹介		2
ユネスコスクール 活動事例①	名古屋市立笹島小学校	4
ユネスコスクール 活動事例②	犬山市立犬山西小学校	6
ユネスコスクール 活動事例③	豊橋市立牛川小学校	8
ユネスコスクール 活動事例④	豊橋市立つつじが丘小学校	10
ユネスコスクール 活動事例⑤	豊橋市立富士見小学校	12
ユネスコスクール 活動事例⑥	豊橋市立小沢小学校	14
ユネスコスクール 活動事例⑦	豊橋市立豊岡中学校	16
ユネスコスクール 活動事例⑧	豊橋市立青陵中学校	18
ユネスコスクール 活動事例⑨	豊田市立藤岡南中学校	20
ユネスコスクール 活動事例⑩	名古屋石田学園 星城中学校	22
ユネスコスクール 活動事例⑪	愛知県立みあい特別支援学校	24
ユネスコスクール 活動事例⑫	愛知教育大学	26
愛知県ユネスコスクール交流会		28

はじめに

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校であり、ユネスコが認定する学校です。平成30（2018）年10月現在、世界182か国で11,000校以上のユネスコスクールがあり、日本国内の加盟校は、1,116校を数えます。本県では、平成26（2014）年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）に関するユネスコ世界会議」を契機としてユネスコスクールへの加盟が進み、令和２（2020）年１月現在、申請中を含め163校が活動しており、国内最大規模となっています。

愛知県教育委員会では、本年度、ユネスコスクールの活動の質的向上と、ユネスコスクール同士の交流を目的とした支援事業及び加盟支援事業を実施いたしました。具体的には、児童・生徒・学生・教員等が交流し、学び合う「ユネスコスクール交流会」の開催を始め、ユネスコスクールへの研修講師派遣、全国大会等研修会への教職員派遣、加盟申請に係る英訳支援等です。また、ESDの重要性を理解し、ESDを実践できる教職員の育成を目指し、管理職・ESD実践担当者等を対象とした研修会も実施いたしました。

さて、国連は、平成27（2015）年に持続可能な世界の実現を目指して17の目標・169のターゲットから構成される「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」を策定しました。本県は、昨年７月に「SDGs未来都市」に選定され、SDGsに沿った施策に取り組んでいます。経済界では、SDGsを経営に取り入れたり、事業に関連付けたりする企業も増えつつあります。

ESDについては、SDGsのターゲット4.7に位置付けられており、「教育が全てのSDGsの基礎」であるとともに、「全てのSDGsが教育に期待」しているとも言われています。ESDを実践するに当たり、SDGsは、地球規模の課題を日常生活と結び付けて考えるのには格好のテーマとなります。SDGsに基づいたESDを実践することにより、未来につながる「正解のない問い」に対して「Think Globally, Act Locally」が推進されることを願っています。

本事例集は、県内各地でESD活動に取り組むユネスコスクールの実践をまとめたものです。ユネスコスクールへの加盟の有無を問わず、全ての学校のESDの充実と広がりにつながるとともに、未来を担う子供たちの学びに向かう力を育むきっかけとなることを願っております。

結びに、本事例集作成に当たり、御協力いただいたユネスコスクールの先生方、及び関係市町村教育委員会を始めとした関係の皆様に心より感謝を申し上げます。

令和２（2020）年３月

愛知県教育委員会

特集 ESD活動支援・協力団体紹介

各学校のESD活動の促進及び支援をする団体を紹介します。

ESDコンソーシアム愛知

愛知県の教育機関、産業界、市民団体が、持続可能な開発のための教育（ESD）を推進するための組織です。愛知県の学校教育の場を始めとして、一般社会の様々な場面で支援を行っています。

各校種並びに地域の特長を生かしたESD活動の展開と定着に向けた、ESD活動を支援する組織の構成と連携についての基盤を形成します。

- **国内外のユネスコスクールとのESDの相互交流**
- **ユネスコスクール以外の学校でのESD活動の実施**
- **社会教育施設、青少年教育施設等との連携**
- **活動の成果を共有するための発表会開催**
- **都道府県教育委員会との連携**
- **コンソーシアム機能を継続するための計画策定**

住　所：〒487-8501 春日井市松本町1200 中部大学春日井キャンパス
連絡先：TEL/FAX 0568-51-7597
H　P：https://esd-aichi.com

中部地方ESD活動支援センター

ESD活動支援センターは国内に８ブロック設置され、中部地方センターは中部７県を対象に各地域のESDの取組をつなぎ、他地域、全国、世界と連携し、それぞれの実践がより豊かになるようにサポートします。

- **ESDツールの作成・配布**
  オリジナルESDツールであるSDGsチェックリスト、ワークシートをウェブサイト等で配布しています。
- **学び合う場づくり**
  ESD実践に関するお悩みや課題の対応、マッチング、講師や教材を紹介します。
  発表会、ワークショップ、交流会なども実施しています。こんな企画をしてほしい、こんな話題が聞きたいなど御要望をお寄せください。

住　所：〒460-0003 名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル4階
連絡先：TEL 052-218-9073　FAX 052-218-8606　メール office@chubuesdcenter.jp
H　P：https://chubu.esdcenter.jp

独立行政法人国際協力機構中部センター（JICA中部）

政府開発援助（ODA）の実施機関として開発途上国で行う国際協力の経験や知見を日本の教育現場に役立てることを目的に開発教育・国際理解教育支援事業を行っています。是非御活用ください。

児童・生徒向け

- **なごや地球ひろば訪問プログラム**
  SDGsや世界の課題が分かる展示案内、国際協力体験談など２時間程度のプログラムを実施。（無料／事前予約制）
- **国際協力出前講座**
  開発途上国での生活や活動について聞いて学ぶプログラム。

教員向け

- **開発教育指導者研修**
  参加型手法やプログラム構築など、開発教育・国際理解教育の授業実践のための研修。
- **教師海外研修**
  開発途上国を訪問し、訪問によって得た気付きや素材を教材にして学校現場での授業実践に役立てていただく研修。

住　所：〒453-0872 名古屋市中村区平池町4丁目60-7
連絡先：TEL 052-533-0220　メール cbictpd@jica.go.jp
H　P：https://www.jica.go.jp/chubu/

JICA中部が運営するなごや地球ひろばは、SDGsや国際協力について学ぶ体験型施設です。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

ACCUはユネスコの基本方針に沿ってアジア太平洋地域と日本国内で教育と文化の分野で活動しています。教育分野では、ユネスコスクール・ESD関連事業を始め、識字教育支援や地域開発、教職員国際交流、高校生のための模擬国連など、多彩な事業を展開しています。

- **ユネスコスクール事務局**

  文部科学省の委託を受け、事務局として質の高いユネスコスクール活動や国内外のユネスコスクールネットワーク強化のために様々な支援を行っています。加盟申請事務の窓口や公式ウェブサイトの運営などの基本業務に加え、ユネスコや大学などと連携した研修会・プログラムの実施や、教員との教材・カリキュラムの共同開発などに取り組んでいます。

住　所：〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32-7F 出版クラブビル
連絡先：TEL 03-5577-2851（代表）　FAX 03-5577-2854
H　P：https://www.accu.or.jp

中部ESD拠点（RCE Chubu）

中部ESD拠点（RCE Chubu）は、国連大学の認定を受けたESDの地域拠点（世界169地域）の一つです。活動対象地は愛知県・岐阜県・三重県にまたがる「伊勢・三河湾流域圏」。中部ESD拠点協議会には、現在、ESDを推進する78団体（教育機関、NPO、行政機関、企業など）が加盟しています。ESDやSDGs（持続可能な開発目標）を地域で実践するための情報交換や連携活動を推進しています。

住　所：〒487-8501 春日井市松本町1200 中部大学国際ESD・SDGsセンター内中部ESD拠点事務局
連絡先：TEL 0568-51-4736　FAX 0568-51-7618　メール office@chubu-esd.net
H　P：http://chubu-esd.net

名古屋ユネスコ協会

途上国の教育支援活動「世界寺子屋運動」の書き損じはがき回収やチャリティー活動、ユネスコスクールのESD活動を進める「ESDパスポート事業」、南山大学とのコラボで平和を市民とともに考える「平和セミナー」、学校への出前授業とユネスコ学習の受入れなどを実施。また、青年部若艫（しゃち）組は小学生の異文化理解のための「世界の遊び」、高校生の国際理解のための「世界の料理」など様々なイベントを開催しています。

住　所：〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-39-23 ライフコア那古野1階
連絡先：TEL 052-583-6662　メール nagoya@unesco.or.jp
H　P：http://www.unesco.or.jp/nagoya/

豊橋ユネスコ協会

地域の小、中、高校を対象に、かつての「軍都豊橋」の軍施設であった豊橋公園に残る第18連隊の「戦争遺跡マップ」、及び現在の愛知大学を中心にあった第15師団・予備士官学校などに関する「豊橋南部地域戦争遺跡マップ」による見学会や、豊橋空襲など戦争体験を基にした平和学習を内容とする出前授業。その他国際理解、異文化交流を目的とした国際料理教室などの出前授業を実施。東三河地域のユネスコスクールにおけるESDの取組の成果を地域で理解し、支援することを目的としたフォーラムの開催や写真パネルの展示会の企画、実施を行っています。

住　所：〒441-8522 豊橋市町畑町1 愛知大学豊橋校舎校友室内
連絡先：TEL 0532-47-4143　FAX 0532-47-4145　メール toyohashi_unsc@yahoo.co.jp
H　P：http://www.unesco.or.jp/toyohashi/

環　境 | **国際理解** | **地域文化** | 気候変動 | 生物多様性 | 防　災 | エネルギー | そ の 他

名古屋市立笹島小学校

創　立：2009年
住　所：〒450-0002 名古屋市中村区名駅四丁目19番1号
連絡先：TEL 052-565-1155　FAX 052-561-2193
学級数：9　児童数：155人
H　P：https://www.nagoya-c.ed.jp/school/sasashima-j/

よりよく生きようとする　ささしまっこの育成

はじめに

本校は、平成22年４月、六反小学校と新明小学校が統合され、笹島中学校と同一敷地・校舎に小中一貫教育校として開校した。学区には名古屋駅があり、高層ビルの立ち並ぶ中心部に位置している。新明小学校で平成４年度から始まった帰国児童の受入れを引き続き行っており、本校児童の約16%が帰国児童である。帰国児童受入校であるということや、中国の小学校・中学校との交流を行うなど、国際色豊かな一面がある一方で、地域に伝わるお囃子や山車といった日本の伝統文化に触れる機会もある。

実践内容❶
「外国語学習と帰国児童が活躍する教育活動の推進」

ねらい：外国語学習の推進と帰国児童の日本での生活への適応指導と英語能力の保持促進

笹島小学校では、６年間を通して、国際感覚の基盤となる英語教育を行っている。国際理解教育に力を入れ、１・２年生では英語ボランティア講師による「英語ふれあい活動」、３・４年生では英語ボランティア講師・小学校教諭による専科の英語活動、５・６年生では笹島中学校英語教諭とAETによる外国語活動に取り組んでいる。言語や文化について体験的に理解を深めるとともにコミュニケーション力の素地を養ってきた。

また、帰国児童が多い本校の特色を生かして、笹島中学校帰国生徒と合同で、授業後、週２回「English Club」を設置している。中学校のAETや英語教員も参加して、日本の生活への適応指導と、英語の能力の保持促進をねらいに行っている。また、小学校・中学校が合同で行う体育祭や文化祭では、日本語でのアナウンスと同時に英語でのアナウンスも行っている。身に付けた英語能力を発揮できる場をたくさん位置付けることで、積極的にコミュニケーションをとる態度を育んでいる。

English Clubの様子

成　果　各行事での発表を通して、帰国児童は、ネイティブな英語を多くの人の前で披露することでコミュニケーションをすることへの自信をもつことができた。また、学区の児童は、帰国児童を認めるとともに英語学習への意欲の喚起につながった。

実践内容❷
「ようこそ笹島小学校へ！」

ねらい：教育旅行生と交流を行い、互いの文化を知り、楽しむことができる。

本校では、望ましい人間関係を形成するために、異学年と交流する縦割り活動を行っている。更に、新たな視点で児童が交流することができるように、これまでの「たてわり集会」に加え、海外の児童との関わりを取り入れ、昨年度より、中国からの教育旅行生との交流を続けている。

成 果

国際交流をすることによって、多様化する国際社会の中で、友達や周りの人の考えを尊重し、自らの力で課題や変化に対応する力を身に付けることができた。

交流活動では、互いの校歌を披露し合ったり、和紙を使って「折り鶴」を一緒に折ったりした。

教育旅行生との交流活動の様子

実践内容❸
「地域文化との関わりと郷土学習」

ねらい：地域の歴史、伝統、文化を知り、地域社会の一員であることを自覚する。

本校の学区には「二福神車」、「唐子車」、「紅葉狩車」という３輌の山車があり、そのうち２輌が校内に保存・展示されている。そのため、地域に200年以上引き継がれている伝統文化と触れ合う機会に恵まれている。

社会科及び総合的な学習の時間において、「山車について調べてみよう」という学習をしている。伝統を守るための苦労や努力の話を聞いたり、実際に中に入ったりする貴重な体験をした。今後は、山車についての学習で関心が高まったことをきっかけに、「他にも地域に残る古い物はないか」と投げ掛け、一人一人に課題を見付けさせていく。見付けた課題について調べたり発表したりすることを通して、地域社会との関わり方を考えたり、地域へ発信したりする能力を育んでいきたい。

成 果

地域の方から話を聞いたり、実際に山車の中に入ったりすることで、山車の歴史や様子について理解させることができた。また、苦労や努力を聞き取ったことで、地域の人々を尊敬する発言や記述が見られるようになった。

山車を見学している様子

おわりに

児童は伝統文化に触れたり、国際交流したりする活動を通して、多様化する国際社会の中で、友達や周りの人の考えを尊重し、自らの力で課題や変化に対応する力を身に付けることができたと考える。

環境 | 国際理解 | **地域文化** | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | **その他**

犬山市立犬山西小学校

創　立：1982年
住　所：〒484-0059 犬山市上坂町五丁目2番地
連絡先：TEL 0568-62-8280　FAX 0568-63-0288
学級数：22　児童数：597人
H　P：http://www.inuyama-aic.ed.jp/kennishi.h.p/

郷土犬山の未来を見つめよう

はじめに

本校は、平成30年にユネスコスクール加盟校に認定された。地域に密着した学習を系統的に行い、ESDを推進することを通して、「人間性豊かな犬山の子の育成」を目指している。生活科と総合的な学習の時間を軸に各教科を関連させたESDカレンダーを作成し、「地域の自然や生き物と親しみ、人々とつながる活動」、「地域の伝統文化や環境とつながる活動」、「歴史、人、社会とつながる活動」を取り入れ、実践を進めている。それらの活動の中で地域探検や地域を知る学習を行い、郷土犬山を愛し、誇りに思う気持ちや地域のために自分ができることを行おうとする気持ちを育むことを目的としている。

実践内容❶
「地域の伝統文化や環境とつながる活動」（3年生）

ねらい：犬山の町並みや文化に触れ、伝統を大切にし、守り伝えていこうとする心情を高める。

3年生は、「犬山のはかせになろう」というテーマで取り組んだ。校区探検を手始めに郷土に関心をもつことから始めた。犬山市で作成している社会科の副読本を資料に用いて調べ学習に取り組み、地域の良さを再発見した。また、夏休みの課題として、各自でテーマを決めて調べ学習を進めるよう指導した。

犬山市は自然環境に恵まれ、歴史のある建物も多い。児童の調べた内容をもとに、犬山の名所を旅する様子を劇化した台本を作成し学習発表会で披露した。また、犬山の歌をリコーダーで演奏することで、郷土の文化に親しんだ。これらの活動を通して、更に犬山市への理解を深めることができた。

一連の学習を通して、犬山には古くから伝わるものが多くあることを知り、この先の未来にも残したいものや伝えていきたいものを考えた。なぜ残したいか、なぜ伝えていきたいのか、その理由を明確にし、授業参観で発表した。更に2年生にも自分たちの思いを伝えた。その後、一年間を振り返り、作文に思いをつづったり、郷土かるたを作成したりした。活動の最後は、学年でかるた大会を行うことで、郷土愛を育むことができた。

校区探検で地域の再発見をしている様子

成果　犬山市の町並みや文化に触れ、地域の良さを発見することができた。その取組を通して、地域の人とコミュニケーションをとることができた。調べたことを劇にまとめて発表することができた。

実践内容❷

「福祉について考えよう」（5年生）

ねらい：福祉実践教室を通して高齢者の立場を理解し、福祉について考えを深める。

5年生は、犬山市社会福祉協議会から外部講師を招へいし、福祉実践教室を行っている。体に障害のある人や高齢者の立場に立って、どのようなことで日常生活に困難があるのか身をもって体験し、自分にできることを考え実践する教室である。前期に、総合的な学習の時間で福祉についてガイダンスを行い、福祉のテーマ「ふだんのくらしをしあわせに」をもとに、自分のテーマを決めて調べ学習を行ったり、福祉関係の仕事やパラリンピックについて学年で学習会を行ったりした。これらの学習を通して社会福祉が何のためにあるのか理解を深めることができた。

福祉実践教室では、犬山市で生活している障害者や市内で活動しているボランティアの方から話を聞き、障害のある人が日常生活でどのようなことで不自由なのか、どのような支援をすると良いのかということについて、実際の状況を知ることができた。その後、車いす・点字・ガイドヘルプ・手話・高齢者疑似体験の5項目について体験を行った。アイマスクの体験を行った児童は、階段や障害物をよけて歩くことの難しさや怖さを身をもって体験し、どのように声を掛けて案内すると良いのか学習した。手話体験では、聴覚に障害のある人が、口述、指書き、手話、板書の四つの方法でコミュニケーションをとっていることを理解することができた。点字体験では、一つ一つの点字をマスの中に打つのに苦労していたが、自分で打った点字を大切に持ち帰る姿が見られた。車いす体験では、一人で操作することの難しさや、わずかな段差でも乗り越える大変さを体験した。高齢者疑似体験では、視野の狭くなる眼鏡や動きが制限されるベストなどを着用して歩行し、高齢者役の友達を誘導することで高齢者の方々が動く感覚や介助の必要性を知ることができた。実際に経験してみて「思ったよりも動きにくいので、びっくりした」、「高齢者だけでなく、小さい子や障害のある人など相手の立場に立って生活しないといけないと思った」などの感想が聞かれた。地域の人々との触れ合いを通して、地域の一員としての自覚を高め、障害をもつ人々や高齢者とともに生活するために大切なことや、自分たちでもできることについて学びを深めた。

福祉実践教室の様子

これらの活動を通して、学んだことをこれからの生活に生かしていこうという意欲や、障害をもつ人や高齢者に対する気持ちに変化を感じることができた。

手話体験の様子

成 果

福祉実践教室は、一人一人が、共生社会について考える良い機会になった。学習を通して共通して学んだことは、障害者や高齢者を特別な存在とは思わず、誰に対しても優しさをもって接することの大切さである。学校生活の中でも、以前より子供たちの行動に優しさや思いやりが見られることが多くなった。

おわりに

ユネスコスクールに加盟登録し、1年が経過した。犬山という地域性と本校を取り巻く環境は、歴史や文化的にも価値が高いものがある。また、学校教育に協力的な土地柄で福祉実践教室など外部講師の力によって学習が深められることが多い。ただ単に他者への思いやりの気持ちをもつことや、実際に声を掛けて助けることの大切さを学んだだけでなく、「本当の意味で人を大切にするということはどういうことなのか」ということを考えることができたのではないかと思われる。

これからも実践研究を進め、郷土を愛し、伝統文化を守りつつ時代に合った社会づくりに貢献しようとする子供たちを育てていきたい。

環境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防災　エネルギー　その他

豊橋市立牛川小学校

創　立：1872年
住　所：〒440-0016 豊橋市牛川町中郷6番地1
連絡先：TEL 0532-52-2616　FAX 0532-57-1967
学級数：21　児童数：577人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/ushikawa-e/

地域のよさに気づき、愛し、誇りに思う子の育成

はじめに

本校は「意欲的にかかわり合い、学び合う『牛川っ子』の育成」をテーマに、教育活動を推進している。

校区は、区画整理事業の進展に伴って大きく様変わりをしているが、まだあちこちに自然の残る落ち着いた地域である。古くからの地域の方は「母校牛川」を誇りに思い、進んで教育活動に協力をしてくださっている。

こうした特性を生かし、地域の自然環境や人と積極的に関わっていけるようにすることが大切だと考える。ESDを「地域を愛し、地域の環境を守っていく持続可能な開発のための教育」と捉え、「地域のよさに気づき、愛し、誇りに思う子ども」の育成を目標に掲げて、日々実践に取り組んでいる。

実践内容❶
「朝倉川調査隊」（4年生）

ねらい：調査活動をする中で地域の朝倉川に愛着をもち、大切にしようとすることができる。

4年生では、毎年、総合的な学習の時間に朝倉川探検をしている。最近では、川で遊ぶことが減り、初めて訪れるという子もいる。

そこで、まずは、朝倉川へ出掛けていって、川遊びをするところから活動を始めた。

川の面白さや良さに気付き始めたところで「朝倉川の自慢できるところを探そう」という視点から調査活動を始めた。川遊びを通して「川に生息する生き物」に興味をもって調べる子、川の中や岸辺の汚れに気付いて「捨てられているごみの量や種類」を調べる子など、それぞれが川を見つめ、課題を見いだしていった。

調査活動をする中で昔の朝倉川はもっときれいだったことを知った子供たちは、「昔のような川に戻したい」という思いをもつようになった。そこで、育水フォーラムの方や市役所の環境保全課の方からの聞き取りを行い、「朝倉川復活プロジェクト」を立ち上げた。図書資料で川の水の透明度と生息する魚類を調べたり、再度川へ出掛けていって水質調査や川辺のごみ拾いなどに取り組んだりした。

もっと多くの人の手で川をきれいにしていく必要があると考えた子供たちは、調査結果を新聞やちらしにまとめ、みんなに協力を呼び掛けることにした。生き物や水質を調べるうちに川の汚れの原因がごみにあると考えたA児は、調査結果をもとにごみを出さないように協力を呼び掛けていた。A児以外にも多くの子が自分の調べたことをもとに川の魅力や問題点を熱心に伝える姿が見られた。

調査活動の様子

成果

各関係組織の協力を得て学習を進めたことで地域の自然環境への興味関心が高まり、「校区の自慢できる場所の一つとしたい」という思いをもつことができた。中には、休日に家族と朝倉川へ出掛ける子もおり、以前よりも川が身近で愛着のあるものになったことが感じられた。

実践内容❷

「支え合ういのち」（6年）

ねらい：地域の高齢者施設訪問を通して、高齢者とのより良い関わり方を考え、行動することができる。

施設訪問の様子

本校では、地域の高齢者の方との触れ合いを大切にした取組が長年行われている。1年の「昔遊びの会」、総合的な学習やクラブ活動における講師など、地域の高齢者の方々に支えられた教育活動を展開している。そんな中、支えられる側から支える側へと子供の意識を変える活動として、6年生が高齢者福祉施設訪問を行っている。

初めに、市の出前講座で認知症を抱える方の様子や気持ちを学んだ。また、施設の方による事前学習でより良い対応の仕方を教えていただいた。その後、訪問に向けて歌や劇などの出し物を考え、折り紙などのプレゼントを用意した。学習したことをもとに歌詞を大きく濃い字で書いた紙を用意するなど、相手の側に立った工夫をしていた。高齢者の方々が訪問を喜んでくださる様子から、役立てたことの喜びを感じている子が多くいた。

成 果　訪問後、もっと高齢者に寄り添いたいとの声が上がり、キットを用いた疑似体験を行った。これらの活動を通し、身近に接する祖父母や近所の方にもできることをしたいという思いが高まった。また施設で働く方の仕事の大切さにも気付くことができた。

実践内容❸

「牛川名人に学ぼう」（3年）

ねらい：地域の方の指導でものづくりを体験して、良いものを作るための努力や工夫を重ねる姿勢を学ぶ。

うどん作りを学ぶ様子

3年生では、社会科の学習をきっかけに校区を探検し、地域で見付けた名人にものづくりを学ぶ活動を行っている。ぶどう農家さんに花摘や摘粒の体験をさせていただいたり（高齢化のため平成30年度で終了）地域の製麺業の方にうどん作りを学んだりしている。

志賀製麺さんは給食に出るソフト麺を製造している。工場見学を通して製麺の様子を学んだ後で、作る際の工夫やこつについて聞き取りをした。実際に自分たちもうどん作りに挑戦することで、努力や苦労に思いをはせ、おいしく安全なものを提供する志賀製麺さんの思いをつかむことができた。

成 果　自分たちの口にするものが地域でおいしく安全に作られていることを知り、感謝の思いをもつことができた。名人の方に親しみをもって校区で声を掛ける姿も見られ、地域に愛着をもつきっかけにもなっている。

おわりに

地域の方々に支えられながらの活動によって、子供たちは地域の中で見守られて成長をしている。子供は学校のものではなく、地域のもの（宝）であることを教員側もよく理解し、地域の方たちとともに歩みながら今後も教育活動を推進していかなくてはならない。ESDの活動として、子供たちが自ら気付き、考え、行動するたくましさを発揮するにはまだ課題が多い。「課題を見付ける力・課題解決に取り組む力・発信する力」と「より積極的に地域と関わろうとする意識」の向上を目指したい。教育課程の更なる見直し（ESDカレンダーの活用）や、これまでの実践を継承・改善するための資料の整理やデータ化を進め、より一層の充実を図りたい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

豊橋市立つつじが丘小学校

創　立：1995年
住　所：〒440-0853 豊橋市佐藤町5丁目16番地の1
連絡先：TEL 0532-64-5121　FAX 0532-65-1215
学級数：21　児童数：584人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/tsutsujigaoka-e/

つつじが丘小学校のESD活動

はじめに

当校は、問題解決の資質や能力を育てることを生活科や総合的な学習の時間のねらいの一つとして位置付けている。それをESDの「地域の人々・文化・自然に対する目を広げる」と捉え、地域に関心をもち、地域を愛する心の育成を目標として実践を重ねてきた。総合的な学習の時間を柱に、社会科や国語科、理科、道徳などと関連付け、横断的に学習することで、学びの姿を系統的に捉え、子供たちが意欲的に活動し続けられると考え、①福祉に関わる学習、②環境に関わる学習、③郷土に関わる学習を行った。

実践内容❶
「めざせ！心のバリアフリー」

ねらい：障害者や高齢者についての理解を深め、相手の立場や気持ちを考え行動する。

5年生の総合的な学習では、目の不自由な人の感覚を味わうために、アイマスクをして教室を歩く体験を行った。子供たちはよく知っているはずの教室を、慎重に歩き、手を伸ばして物の位置を探り、不安そうな様子だった。高齢者の体験では、両手に軍手を二重にはめ、ペットボトルの蓋を開ける動作を行った。指先が思うように曲がらず物をつかめなかったり、力が入らず蓋を回せなかったりと苦労する姿が見られた。これらの体験から、障害者や高齢者は、自分たちとは違う感覚で生活をし、苦労していると気が付いた。

次に、出前授業「認知症サポーター養成講座」では、認知症により、多くの高齢者が困っていると知った。近くに困っている人がいたら、優しく声を掛け、近くにいる大人を呼んできてほしいと伝えられた。子供たちは、認知症の方が何に困っているのか、どんな気持ちでいるのかを考えながら、声を掛ける練習をし、互いにアドバイスをし合った。声を掛けるのは勇気がいることや、相手の気持ちを考えることの難しさを学んだ。

最後に、学校に隣接する地域福祉センターの施設見学や利用する高齢者と交流を行った。施設を利用している高齢者の方は、今まで学んできた高齢者と違い、とても元気な様子だった。子供たちは「センターを利用する高齢者は、どうして元気なのか」と疑問をもった。高齢者との交流から、元気のもとは「たくさんの人と話すこと」「楽しく過ごしたいという気持ち」であると気付いた。

地域福祉センターへ訪問

成果

これらの活動を通して、障害者、高齢者は自分たちと同じところや違うところがあると気が付くことができた。自分勝手に助けるのではなく、その人が困っていること、苦手なこと、助けてほしいことを考え、手を差し出したり、明るい気持ちで接したりしたいと考えるようになった。

実践内容❷

「つつじわくわく生き物探検隊」

わくわく池をきれいにしたよ

ねらい：自然や生き物、自分とのつながり・関わりに関心をもち、活動に主体的に参加する。

４年生の総合的な学習では、身近な学校の自然を取り上げ学習した。子供たちは、学校内にある「わくわく池」の生き物に興味をもち、植物や生き物の住む環境に目を向けて調べ学習を進めた。

調べ学習の一つで、自然史博物館の方の話を聞く機会を設けた。博物館の方の話から、今自然は外来種が持ち込まれたことによって生態系が崩されたり、生き物の生命に関わる問題が起きたりしていると学んだ。

「わくわく池」も同じように外来種ばかりがいることに気が付いた。子供たちは「わくわく池」を何とかしたいと考え、地域の方に協力してもらいながら、池の水を抜いて掃除したり、在来種と外来種に分ける作業を行ったりして、生き物が住みやすい環境を作り上げることができた。

成 果

調べ学習や体験を通して、壊れた生態系をもとに戻すことはとても時間がかかり、多くの人の協力が必要であると学んだ。

人間の都合で生き物を捨てたり、逃がしたりせず、生き物の命をこれからはもっと大切にしたいと考えることができた。

実践内容❸

「つつじの自慢みんなの祭り」

佐藤八幡社で話を聞いたよ

ねらい：地域の祭りに関心をもつことで、郷土の文化について理解を深め、継承していく。

３年生は、郷土の文化について理解を深めるため、校区で行う三つの祭りに目を向けて学習を進めた。

子供たちは、実際に祭りに参加したり、そこに関わる自治会や御輿（みこし）会の方々の話を聞いたりした。それらの活動の中で、祭りにはたくさんの人が関わっていることや、その人たちが祭りをどれだけ大切に思っているか気付くことができた。また、長い間受け継がれてきた歴史の重みを感じた。

三つの祭りを伝えるために、子供たちは学んだことをもとにシナリオを作り、つつじっ子発表会で発表した。「祭りをやっている人たちにありがとうと伝えたい」という気持ちをもち、御輿（みこし）を担いだり、群読をしたり、一人一人が生き生きと発表することができた。

成 果

ふだん楽しいという気持ちだけで祭りに参加していたが、歴史や関わる人の気持ちを考えることができた。地域の人のおかげで長く続いてきた祭りをこれからも大切にしたい、いろいろな人に祭りを伝えたいと、郷土を愛する心を育てることができた。

おわりに

身近な教材は子供たちにとって問題意識をもちやすく、進んで活動に参加する態度が見られたり、地域の方との温かな人間関係が育まれたりした。また、課題を解決するために話合いを多く設けることで、自分の意見に自信をもてたり、相手の考えに共感したりすることができた。

しかし、子供たちは目の前の課題を考えるだけで満足している。今だけではなく、未来を予測して計画を立てる力を育てていく必要があると感じた。また、相手の意見や決められていることに対して、批判的に考えることが苦手である。より持続可能な社会について考えられるよう、様々な角度から物事を見る学習を進めていきたい。

環　境 | 国際理解 | **地域文化** | 気候変動 | 生物多様性 | **防　災** | エネルギー | そ の 他

豊橋市立富士見小学校

創　立：1984年
住　所：〒441-8135 豊橋市富士見台二丁目1番地の5
連絡先：TEL 0532-23-3232　FAX 0532-44-2065
学級数：18　児童数：424人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/fujimi-e/

地域から学び、地域への愛情を深める子の育成

はじめに

本校区は豊橋52校区中48番目に誕生し、学校が開校して36年目という比較的新しい校区である。昭和30年代からの高度経済成長期に臨海工業地域である明海地区が造られた。そこに進出する企業の従業員のためのベッドタウンとして本校区が造られたため住宅地が広がっており、祖父母や父母の代に本校区に引っ越してきた家庭が多い。本校区は歴史が浅いが、富士見の町をより良くしたいと願う人々がたくさんいる。おやじの会や学校ボランティアなど、児童の身近なところで活動を支えている人々もいる。その人々の思いに迫ることで、自分たちが暮らす地域への理解と愛情を深めることを目指している。

実践内容❶
「地域の消防機関との関わりから学ぶ防災教育」

ねらい：消防機関との関わりを通して、消防に携わる人の努力や火事を防ぐための取組を理解する。

本実践の始めに、身近な消火設備を探す探検の時間を設けた。探検の中で児童は、学校の中や校区の道路には、消火器や消火栓などたくさんの消火設備が設置してあることに気付いた。そして、消火設備の数や設置してある位置に着目することで、「自分たちは多くの消火設備に守られている」ことに気付き、地域を守る工夫を理解することができた。

その後、道具から人へと視野を広げるために、消防署の見学を行った。児童は見学を通して、消防士の訓練の様子や消防署内の仕組み、消防道具の工夫など、これまで直接関わることのなかった消防の姿を知ることができた。消防士が毎日訓練を行っていることや火事の連絡を受けてから1分で出動することを知った児童は、驚きの声を上げるとともに、人の命を守るためには「毎日の訓練が大切なこと」や「1秒でも早く消火しなければならないこと」に気付いた。

消防団との関わりでは、消防団が校区のパトロールやイベントの交通整理を行っていること、また、日々放水訓練を行っていることを知り、何のためにこのような活動をしているのかという疑問を抱いた。そして、話合いの結果、校区に暮らす人々の命を守るためという結論に至った。児童は、地域の消防機関との関わりを通して、安全に暮らせるよう多くの人に支えられていることを実感した。同時に、自分の命は自分で守るという思いも高まり、火事を起こさない行動を心掛けて生活しなければならないことを感じた。

消防団の放水訓練を体験する様子

成 果

本実践を通して、児童は地域の消火設備について知ることができた。家の周りには多くの消火器や消火栓が設置されていて、いざというときにはそれらの道具を使って消火することを学習した。また、消防機関との関わりを通して、命を守るための努力や火事を防ぐための行動を学ぶことができた。

実践内容❷

「ふるさと富士見の秘密―開拓者の思いにせまる―」

ねらい：校区の歴史についての資料を読み取り追究することで、校区の歴史を知り地域への愛情を深める。

開墾体験の様子

本校ができて36年になる。現在は住宅地であるが、以前は畑が広がり、更にその前は森林や荒地だった。校区に住む人たちの多くが畑から住宅地への転用後に引っ越してきたため、住宅ができる前の校区のことを知っている児童はほとんどいない。開拓の歴史や当時の人々の生き様に触れることで、地域のことを知り愛情を深めることができるのではないかと考え、実践を行った。

まず、本校区はどのようなところか話し合った。すると「生活用品を売っている店が少なく、住宅ばかり」という意見が出た。また本校で昔から歌われている歌の歌詞にも注目した。歌詞の中に「わかい町」とあり、新しい校区なのかと疑問をもった。

校区ができる前は何があったのか知るために年代の違う二つの地図の色分けを行った。色分けする中で、森林や荒地があった土地が畑に変わっていると気付いた。なぜ畑に変わったのか疑問が出てきたので調べ学習を行った。すると、地形が軍隊の演習場にふさわしいという理由で豊橋市が軍隊を誘致したことや、終戦後、食料不足になったため演習場を開拓し、畑に造り替えたことを知った。更に調べを進めると、酸性土壌のため作物が育たないことや根が邪魔をして鍬が入らないことなど、開墾作業の困難さを知り、実際に体験してみたいと考えた。そこで「開墾体験」「糞尿(ふんにょう)運び体験」「すいとん作り体験」といった活動を取り入れ、開拓者の思いを少しでも感じられるようにした。

「苦しい生活だったのに、やめる人はほとんどいなかった」という共通問題について調べたり体験活動から考えたりし、問題解決を図った。その結果、「農作物ができるようになって生活が楽になった」などの意見が多い中、「町をつくる希望をもっていた」という開拓者の気持ちに寄り沿った意見も出てきた。

現在の地図と比べて変わっているところを探すと、海を埋め立てて工場ができていることを見付けた。そこで働く人たちのために造られた町が本校区であり、本校区を造るために開拓者が移転せざるを得なくなったことを知った。本校区ができることについて開拓者たちはどう思っていたのだろうか。開拓者の手記に「お金には代え難い何かがある」という記述があったため開拓者の気持ちを知るには、その「何か」という言葉がキーワードではないかと注目した。話し合った結果、思い出がつまった土地だから手放したくなかったのではないかと意見がまとまった。

最後に、これからの校区をどうしていきたいか話し合った。児童数の減少や売地が多い校区の現状を踏まえ、町の人口が増えるための方法を考えた。その中で、校区の良さを伝え、住みやすい町づくりをしていくことが大切だという思いをもった。

糞尿運び体験の様子

成 果

初めは本校区の成り立ちについて何も知らなかった児童が、学習を通して校区の秘密を知り、熱心に調べ学習や話合いに取り組む様子が見られた。そして、開拓者の思いを受け継ぎ、自分たちが校区の歴史をつくっていくために進んで行動していくことが大切だという思いをもつことができた。

おわりに

消防団の活動を取り上げた「防災学習」では消防団員をゲストティーチャーとして招き、訓練を見学したり自分たちも消防団の動きを体験したりすることで、地域を思う人々の思いに触れることができた。また「地域文化学習」では、地域の歴史を知る学習や体験活動を通して地域をより良くしていきたいと願っていた先人の思いに触れ、自分たちが地域に貢献できることは何かとの考えをもつことができた。

これらの学習を今後の自己の生き方に取り入れるためには、地域から学び郷土愛を育むことが不可欠だと考える。更に学んだことを生かしていくためには、他教科との連動や系統性も必要であろう。今後も学校全体でESDを意識し、活動に取り組みたい。

環　境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防　災　エネルギー　その他

豊橋市立小沢小学校

創　立：1873年
住　所：〒441-3122 豊橋市小島町荒巻81番地の1
連絡先：TEL 0532-21-1410　FAX 0532-44-5014
学級数：8　児童数：114人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/ozawa-e/

ふるさと小沢と家族を愛する子の育成

はじめに

本校区は、豊橋市の南端に位置し、特産の小島梨を始め農業中心の自然豊かな校区である。校区に国道は通っているが、商業施設はなく落ち着いた地区である。小沢校区に昔から住んでいる方が多く、多くの方が顔なじみである。保護者の多くも卒業生で学校に協力的である。

本校は、全校児童114人の小規模校である。子供たちは明るく素直な子が多く、異学年の子供とも仲が良い。地域の教材や人材を生かしながら、「ふるさと小沢と家族を愛する子の育成」を目指し、地域を理解し、地域を愛し、地域とともに生きる力の育成を目標として、生活科や総合的な学習を中心に実践を行っている。

実践内容❶
「『小島梨』のひみつを探ろう」

ねらい：ふるさと小沢の名産「小島梨」について調べることで、地域の産業についての理解を深める。

春になると校区のあちらこちらに白くかわいい梨の花が咲き誇る。小沢校区の特産の「小島梨」の花である。校区内に小島梨の生産農家が多いことから、３年生は「小島梨のひみつを探ろう」をテーマに総合的な学習で小島梨について調べ学習を行っている。本やインターネットを使って調べるだけでなく、実際に梨の生育状況に合わせて、梨農家に見学に行っている。４月は開花の様子を観察しに行き、６月には小さい梨の実を摘果する体験を行った。また、９月には大きく実った梨の収穫体験もすることができた。このように学校の地域教育ボランティアや保護者の協力をいただき、体験活動を行っている。実際に梨畑に出向くことで、新しい疑問をもち、農家の方から直接質問に答えていただきながら、学習を進めることができた。秋の枝の剪定（せんてい）、春の摘花、夏の害虫の駆除、台風被害を最小限に抑えるための工夫など、おいしい梨を育てるためには、１年を通して世話をしていかなくてはならないことを子供たちは知ることができた。また、農家の方との交流から、農家の方の梨に対する愛情を感じ取った子供もおり、地元の小島梨についての理解を深めることができた。

更に、全校の行事「第22回小島なしの皮むき大会」の中で、保護者や全校の子供たちに向け、学習した成果を発表した。梨農家の１年間を紙芝居にして、仕事の紹介や農家の方の喜び、願いについても紹介することができた。

梨畑での摘果作業の見学

成　果

継続して梨農家に足を運ぶことで、本やインターネットでは、気付くことができない梨農家の方の気持ちも考えることができた。梨を味わい、農家の方に感謝の気持ちをもつこともできた。そして、小島梨が子供たちにとって、今まで以上に身近なものとなったことが成果と言える。

実践内容❷

「守れ、ふるさと　～アカウミガメ～」

ねらい：豊橋の表浜海岸で産卵するアカウミガメのことを調べ、環境保全の大切さを学ぶ。

表浜での清掃活動

本校区は、太平洋に面しており、3階の教室から、太平洋を望むことができる。地元の海岸である表浜海岸には、毎年アカウミガメが産卵に来る。本校の4年生は総合的な学習で「守れ、ふるさと～アカウミガメ～」をテーマに学習を行っている。

子供たちは、9月の野外宿泊活動で海岸に行き、清掃活動を行った。台風後だったため、海岸には驚くほどたくさんのごみが打ち上げられていた。ごみの中に、生活ごみが多くあるのを見て子供たちは驚きをもち、更に、アカウミガメがクラゲと間違えて飲み込んでしまうビニールごみも多いことが問題であると考えた。そして、年々減少傾向にある表浜海岸に来るアカウミガメを守るためには、どのような環境が必要なのか、自分たちにできることは何かについて各自で調べ、学級で話し合い、意見を交換した。その後、豊橋市役所環境保全課の方をお招きし、アカウミガメが産卵できる美しい海岸や自然環境を残すことの大切さを学んだ。学んだことを壁新聞にし、全校に発信することができた。

成 果　調べ学習を進める中で、アカウミガメと自分たちの生活がつながっていることが分かり、ふるさと小沢の環境を守るために、自分たちができることを考え、実践していこうという気持ちが高まったと考える。

実践内容❸

「ふるさと小沢を味わう」

ねらい：地域教育ボランティアとともに農業に取り組み、農業に関心をもち、収穫に感謝する気持ちをもつ。

校長先生と一緒にブロッコリーの収穫

5年生の総合的な学習の時間に、地域教育ボランティアの協力や指導を受けながら、農業体験を行った。5月の田植には、裸足（はだし）になって田んぼに入り、一本一本丁寧に苗を植えることができた。9月には稲刈りと脱穀の体験をした。また、学校の農園では、全校児童が縦割り班で協力して、サツマイモや小沢の特産のブロッコリーなどの栽培活動を行った。収穫したサツマイモは、焼いも集会を開き、全校で味わった。ブロッコリーは、教員とともに収穫体験を行った。また、毎年1月にはお世話になっている方々を招待し、「感謝の会」を開いている。その中で、収穫した米で保護者の方や地域教育ボランティアの方とともに餅つきをし、収穫に感謝しつつ、ふるさと小沢の味を味わうことができた。

成 果　栽培活動を通して、栽培の楽しさや農家の方の苦労を知ることができた。また、地域の方々との交流を通して、親近感や感謝の気持ちを抱くことができた。

おわりに

地域の方や地域教育ボランティアに協力していただきながら、食農教育を行ってきた。これらの活動を通して、ふだん身近にありすぎて見えていない小沢校区のすばらしさに気付くことができた。

また、表浜海岸の問題に気付き、自分の地域の環境を守るために自分たちから行動を起こそうという気持ちをもつことができた。アカウミガメを守りたいという子供たちの気持ちを大切にし、保全活動を継続していきたいと考えている。

地域を理解し、地域を愛し、地域とともに生き、自分の「ふるさと小沢」が大好きと言える子供たちを育てていくために、今後も活動を継続していきたい。

環　境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防　災 | エネルギー | **その他**

豊橋市立豊岡中学校

創　立：1950年
住　所：〒440-0832 豊橋市中岩田1丁目5の2
連絡先：TEL 0532-61-3278　FAX 0532-65-1201
学級数：17　生徒数：481人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/toyooka-j/

「自立・友愛・創造」を目指した学校づくり

はじめに

本校は、豊橋の東部に位置し、全校生徒数の20％を外国籍生徒が占めており、多文化が共生している中学校である。「自立・友愛・創造」を学校理念として、ESDを「地域との関わりの中で継続可能な社会づくりへ貢献していくもの」と捉え、ESDの実践を通して責任をもち、進んで行動する力や自ら学び考える力の育成を目指している。

本校が伝統として大切にしてきた３本柱「あいさつ・歌・ボランティア」の活性化のために、生徒会役員が中心となって休日に行うホリデーボランティア（ホリボラ）と挨拶ボランティア（あいボラ）を継続的に行っている。

実践内容❶

「学校を活性化する挨拶ボランティア」

ねらい：積極的に挨拶をすることで学校全体を明るい雰囲気にし、より良い人間関係を築く。

挨拶ボランティアは、通称あいボラと名付けられ、平成27年度から「挨拶を盛り上げよう」という思いで、生徒会役員が中心となって始まった。毎朝、挨拶をしたいと思う生徒たちが自主的に集まり、校門付近や昇降口に立ち、生徒や地域の方に挨拶をしている。中には、野球部や吹奏楽部など部活動の仲間に参加を呼び掛け、部活動単位で活動している生徒たちもいる。あいボラのおかげで、毎朝学校の前を通る地域の方からは、「朝から元気な声で挨拶をされると気持ちがいい」という声をいただいている。

冬など肌寒い季節は、参加人数が少なくなることがある。そうしたときは生徒議会で改善策を話し合い、キャンペーンなどを開催し人数を増やす取組を積極的に行っている。生徒だけでなく、教員も昇降口に立って生徒とともに挨拶を盛り上げている。

挨拶ボランティアをする生徒

成　果

今まで挨拶ボランティアに参加したことがなかった生徒も、友達に誘われ参加する姿が多く見られた。野球部など部活動単位で参加する生徒も多く見られる。参加した生徒は生き生きと明るい挨拶を学年に関係なく届けることができ、確かなやりがいを感じられている。

実践内容❷

「地域に貢献するホリデーボランティア」

ねらい：自主的なボランティア活動を校区内や市内に広げ、奉仕の心を育む。

公園清掃に取り組む生徒たち

ホリデーボランティアは、平成14年に第１回が始まってから、今年で18年目を迎える伝統的な活動である。開始当初は、校区内の公園清掃のみを行っており、参加人数もまだまだ少なかった。現在は公園清掃が４回、小学校区防災訓練での手伝いボランティアが１回、小学校運動会及び小学校区の運動会の手伝いボランティアが２回、「トイレ掃除に学ぶ会」の方の指導の下で学校のトイレ掃除をする活動が１回、PTAバザーの準備・手伝いが１回と多岐にわたるようになった。公園清掃は校区内の11の公園を学年混合の班に分かれて清掃活動を行う。落ち葉集めや草取り、トイレ掃除などが主な活動である。

第２回のホリデーボランティアの活動後の振り返りには、「落ち葉やごみがたくさん落ちていたけど、きれいになるととても気持ち良かったし、またやりたいなと思いました」など、ホリデーボランティアという活動にやりがいを感じている生徒が多い。近年、一部の町内では、地域の方々から清掃活動を一緒に行いたいという声が上がり、生徒たちとともに公園清掃を行っている。共に活動することにより、地域とのつながりが実感でき、地域のために貢献していると感じる瞬間である。

秋に行われるPTAバザーでは、生徒たちが様々な係を分担し、前日の物品搬入や会場設営をPTAの方と一緒に行っている。大量の品物が集まるため、PTAの方々にとって、生徒ボランティアは大変ありがたい存在となっている。また、当日も朝から行列ができるほど多数のお客さんが来場するため、お客さんの接客やバザーの運営などに意欲的に取り組み、力を発揮している。ここでも、保護者や地域の方々が活躍する生徒たちの姿を見て、激励や感謝の言葉を受けることがあり、成長の一端を担う活動となっている。

また、小学校区の運動会の手伝いボランティアでは、在校していた２校の運動会に分かれ、係として器具や審判、小学生の支援などを行っている。中学生が、母校で成長した姿を見せることは、小学生にとって、将来の中学生像のイメージづくりにつながり、小中連携の場となっている。本校では18年続く伝統ということもあり、生徒自身も先輩たちが築き上げてきた伝統をどうしたらより良いものにしていけるか考え、今後も取組を進めていきたいと考えている。

地域の方とともに取り組む生徒たち

成 果

班編成から清掃道具の準備、当日の始めの会・終わりの会までボランティア委員と生徒会役員が協力して行っている。本年度行われた第５回ホリボラは、延べ216名の生徒が参加した。自主的な活動が推進できているとともに、地域を愛する心や「地域を良くしたい」と思う心が育っている。

おわりに

本校では、生徒会役員を中心に生徒主体でボランティア活動に取り組んでいる。２年前、生徒総会で参加者を増やすための方法を考え、昨年度から申込用紙に複数名の名前を書く欄を設け、友達と一緒に気軽に参加できるように改善した。その結果、友達に誘われて初めて参加する生徒が増えた。

ボランティアを一度経験すれば、人のために働くことのやりがいに気付けるだろう。その価値にまずは多くの人に触れてもらいたいという考えの基、様々な方法で参加者を募っている。

今行われている公園清掃や運動会ボランティアが、10年後、20年後も継続して行われる価値ある活動になるために、今後も具体的な手立てを見いだしていきたい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

豊橋市立青陵中学校

創　立：1948年
住　所：〒440-0016 豊橋市牛川町洗島108番地の1
連絡先：TEL 0532-54-2165　FAX 0532-57-1962
学級数：19　生徒数：575人
H　P：http://www.toyohashi-c.ed.jp/seiryou-j/

誇りと伝統でつくる持続可能な未来

はじめに

本校は、「豊かな知性をみがく」「協調と思いやりの精神を養う」「たくましい心身を鍛える」という教育目標のもとに、ESDを持続可能な社会づくりの根幹として捉え、ESDの実践を通して主体的に探究し、思いや学びを高め合える生徒の育成を目標としている。具体的には、応援団活動、夏みかん並木の保全といった伝統を大切にし、継続させていく活動に合わせて、本年度の総合的な学習の時間では、ユニクロプロジェクトと称して、国際理解につながる学習を行った。様々な取組を通して人と関わり、ものと関わることで多様な価値観を知り、学校全体としてグローバル社会を生き抜く生徒の育成を目指している。

実践内容❶
「伝統を重んじる応援団～被災地へのエール～」

ねらい：青陵中の誇りをもち、応援団を学校全体として受け継いでいける生徒の育成

青陵中学校では「伝統を引き継ぐこと」「愛校心を高めること」「青陵中生としての誇りをもつこと」をねらいとし、応援団活動が行われている。応援団は1年生の5月、希望者による体験入団があり、体育祭から活動がスタートする。最後は3年生の青陵祭（文化祭）で活動を終える。青陵中学校の応援団は平成4年から始まり、今年で28年目となる。体育祭の応援団演舞だけでなく、平成23年度からは、青陵祭で全校演舞も行われるようになった。全校演舞は、東日本大震災で被災した東北の人々へエールを送ろうという思いから始まり、今では青陵祭の目玉の一つにもなっている。また近年では、集中豪雨や台風により被災している各地へエールを送ろうという思いにつながり、全体での練習が始まる前に、応援団長から話をし、全生徒が全校演舞の意義を確認しながら行うことができている。また近年、団長から、新団長へ世代交代をする「継承式」を取り入れたこともあり、全校で行う演舞を通して、3年生から後輩たちへ伝統を継承する場としての意味も加えられている。全校演舞を行うことで、応援団に憧れ、翌年応援団への入団を希望する生徒も増えている。近年では特に女子生徒の入団希望が増え、男女関係なく応援団を盛り上げることに寄与することができている。また、青陵祭の応援団全校演舞を楽しみに来校される地域の方も少なくないことから、応援団が地域との橋渡しの一つとなっている。

応援団を中心とした全校演舞

成果

全校演舞を通して、子供たちは青陵中の伝統を引き継ぐ大切さを感じている姿が見られた。また、日本で起きている様々な自然災害を他人事でなく、日本全体の問題として捉えている生徒も増えてきた。また、応援団を楽しみに来校される地域の方も少なくなく、学校と地域をつなぐものとなっている。

実践内容❷

「夏みかん並木とつくる心」

ねらい：青陵中の伝統である夏みかん並木の育成を通じて、地域とつながるとともに次世代へ受け継ぐ生徒の育成

夏みかん収穫の様子

青陵中学校では、毎年１月に夏みかん収穫作業が行われる。青陵街道沿いに植えられた約70本の夏みかん並木は、昭和35年の５月に、「郷土への奉仕活動を！」をテーマに当時の生徒会役員の発案で、校区の青陵街道に地域の特産でもある香り豊かな夏みかんを植えたのが始まりである。このことがテレビ番組で紹介され、詩人のサトウ・ハチローさんが「きいろが きいろが かがやきになる」という夏みかんの詩を書いてくださった。先輩方による、地域の自然を愛し緑を育てる活動を引き継ぐ夏みかん並木は、緑化委員会を中心に育てられてきた。現在は生徒会が中心となりボランティアを募集し、環境委員会が協力をして収穫している。収穫した夏みかんは、地域の福祉施設に届けられている。また、りんご並木の育成をしている長野県の飯田東中学校にも届け、交流を続けている。

成 果　毎年多くの生徒がボランティアを希望し、収穫及び磨き作業を行っている。夏みかん並木の育成を通じて、地域の方や他県の中学校ともつながることができた。特に他の中学校とつながることで、互いに高め合える環境が生徒の意欲向上につながっている。

実践内容❸

「総合的な学習の時間における ユニクロプロジェクトの実践」

ねらい：SDGsへの関心を高め、自分たちでできることから行動に移せる生徒の育成

集まった服を畳む生徒

本年度、第２学年における総合的な学習の時間では、勤労に関する学習を行った。学習内容の一つとして、ユニクロによる出前授業を依頼した。出前授業を受けて、生徒は職場体験への意欲を高めるとともに、働く意義の一つに社会貢献があることを学んだ。また、この授業を受け、SDGsへの関心を高めるとともに、自分たちにできることから行動したいという声からユニクロプロジェクトが始まった。自分たちにできることは何か考えることから始め、クラスで意見を出し合い、できることを計画した。その結果、自分たちにできることとして青陵中学校を始め、近隣の小学校や市民館、幼稚園や保育園にも依頼をして、不用となった子供服を集め、ユニクロを通して難民へ服を送るという活動を実践した。本年度の活動では、子供服をおよそ五千着回収することができた。

成 果　今年度の活動では、最終的に学校全体だけでなく、地域も巻き込みこのプロジェクトを推進することができた。出前講座から始まり、生徒たちの自主的な「何か貢献したい」という思いが大きな力となるとともに、新たな課題を見付けることができた。

おわりに

実践①、②については、主に青陵中の伝統である活動を通じて学んできた。しかし、これから先は時代に合ったニーズに応えるため、その都度学校全体で考えていきながら持続可能な社会づくりに貢献していきたい。実践③で取り上げたSDGsは、今後も様々な場面で関心を高められる機会を設ける必要性を感じた。今回のプロジェクトは生徒たちの自主性から生まれ、学校、地域を巻き込んでできた活動である。そのため、来年度以降も綿密に計画を立てた上で、実践に移していきたい。また、様々な場面で地域を始め、いろいろな人と関わる機会があったため、今後も多くの人と関わる中で協働について考えられる生徒を育成していきたい。

環境 | **国際理解** | **地域文化** | 気候変動 | 生物多様性 | **防災** | エネルギー | その他

豊田市立藤岡南中学校

創　立：2011年
住　所：〒470-0431 豊田市西中山町蔵屋敷86-1
連絡先：TEL 0565-76-2410　FAX 0565-76-2420
学級数：13　生徒数：336人
H　P：http://www2.toyota.ed.jp/swas/index.php?id=c_fujiokaminami

未来をともに生きる力の育成を目指して

はじめに

「ともに生きる」の校訓のもと、変化の激しい時代を生き抜くために、「多様な人と協働しながら、自分や仲間を生かすことができ、新しい発想をもって学び続ける力」＝「未来をともに生きる力」を育てたいと考え、実践を進めてきた。学校、地域、世界、そして自分自身を見つめ、課題を見いだし、その解決に向けて試行錯誤しながら実際に行動に移すことで、何事にも自信をもって取り組む姿勢を期待している。ESDの拠点校として、地域に根差した活動を中心としながら、地域へ発信する力を育むことで、地域から世界へと広い視野をもって活動を広げようとする意欲を高めたい。

実践内容❶
「SDGsアンバサダーPROJECT in 藤岡南」

ねらい：SDGsについての理解を深めるとともに、地域に広める活動をすることで目標達成に貢献する。

豊田市は昨年、内閣府からSDGs未来都市に認定された。そこで今年度は、3年生の総合的な学習の時間でSDGsを取り上げ、その目標達成に向けた活動をすることがESDにつながるという、教員・生徒の共通理解のもと、活動を進めてきた。導入として、カードゲーム「2030 SDGs」を実施した。その後、10月の文化祭で、SDGsを地域の人に知ってもらうことを目標とし、修学旅行で訪れる関東地方で、SDGsについて更に学ぶこととした。学級別活動では、豊田市と同じくSDGs未来都市に認定されている神奈川県のSDGsパートナーである企業でインタビューを行ったり、内閣府を訪れて地方分権について学んだりした。班別活動では、SDGsのゴールを意識した場所や施設を訪れ、藤岡南地区にも取り入れたいことを数多く見付けてきた。

9月には、豊田市役所未来都市推進課の方を講師に迎え、豊田市のSDGsへの取組について学ぶとともに、SDGs啓発のためのノベルティを考えるワークショップを行った。10月の地域との合同文化祭では、3年生のフロアをSDGs啓発フロアとし、修学旅行ブースや各学級のブース、豊田市のブースなどを設置し、様々な方法でSDGsを地域の方に知らせた。各学級のブースは、修学旅行で学んだことを意識し、SDGs目標11「住み続けられるまちづくり」について学んできたクラスは、豊田市の課題である鳥獣被害の拡大の解決のため、ジビエ肉を使った焼きそばを販売したり、自分たちが目指すこれからの藤岡南地区のまちづくりを提案したりした。

ジビエをたくさんの人に食べてもらった

成果

SDGsについて学ぶ際、外部講師を活用したり、実際に現地に出向いて調べたりしたことで、楽しみながら主体的に学習を進めることができた。グループ活動を中心とすることで、多くの場面で対話を生むことができた。実際に発表の場を設定したことで、意欲を持続させることができた。

実践内容❷

「防災フェスタ ～地域を守れる自分になろう～」

仲間を、地域を守るためのAED講習

ねらい：自分たちの住む地区の安全について学び、地域を守る自分になるためにできることを考える。

２年生は５月に地域実態調査として、愛知工業大学の教授や学生らとともに学区内の危険地域の調査を実施し、ハザードマップを作成した。ちょっとした高架下のひび割れや雑木林、むき出しになっている地層などが突如として脅威となって自分たちに襲い掛かってくるかもしれない恐怖を感じ、自分たちに何ができるかを考えた。６月には、自然災害が発生したときに助けられる立場から助ける立場になるために何ができるかを考え、地域と協同で防災フェスタを行った。防災グッズ、応急処置、防災食、地域調査の発表班に分かれ、それぞれのブースで学んだこと、自分たちにできることを地域の方々に伝えた。

成 果　地域調査では、今まで見えていなかった危険や災害のための設備などが数多く存在することに気付くことができた。防災フェスタでは、学校に多くの人が避難してきた場合をイメージし、リアリティのある提案や活動をすることができた。

実践内容❸

「世界一熱いラグビーをMINAMIから！」

班で調べたことをクラスのみんなに伝える

ねらい：ラグビーワールドカップを通して世界に目を向け、日本の良さを考えられるようにする。

今年度、ラグビーワールドカップが豊田市で開催された。本校は南アフリカチームのフレンドシップ校に認定され、１年生はラグビーを通して国際理解教育を行った。南アフリカ担当、ラグビー担当、南アフリカのラグビー担当に分かれて調べ学習を行い、担当ごとに模造紙にまとめて発表をし、理解を深めた。マンデラ大統領の生き様から、校訓「ともに生きる」の実現に向けて、南アフリカのために何ができるか意見を出し合い、ラグビー南アフリカ代表に向けて、折り鶴やメッセージボードを制作した。文化祭では、タグラグビーを地域の方と一緒に行ったり、南アフリカの特産品である有機ルイボスティーの試飲を行ったりした。また、調べたことを地域の方に向けて発表し、集中豪雨の被災地支援を行ったカナダ代表のように、少しでも何かできないかと考え、募金活動を行った。

成 果　ラグビーを通して世界と自分とのつながりに気付き、自分にできることを考えることができた。「ともに生きる」の対象が、身近な人だけでなく、遠い国の誰かを意識することができ、SDGsの視点を示すことにより、その活動一つ一つに意味付けをすることができた。

おわりに

本校がユネスコスクールに認定されて５年が経過した。その間、少しずつ形を変えながらも、総合的な学習の時間を基本として、ESDに取り組んでいる。本校は３年前から、アクティブ・ラーニングの視点で授業改善を行っている。その中の取組の一つとして、毎朝の学習や各教科で「対話」を活発に行うことを重視している。それにより、総合的な学習の時間でも多くの場面でより深い学びへとつながったと感じている。今後、生徒がより充実した学びができるよう、カリキュラムマネジメントを更に進めていく。また、各教科や行事との連携を大切にして取り組み、限られた時間の中でも、SDGs目標４「質の高い教育」が実現できるようにしていきたい。

環　境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防　災　エネルギー　その他

名古屋石田学園 星城中学校

創　立：1993年
住　所：〒470-1161 豊明市栄町新左山20
連絡先：TEL 0562-97-3121　FAX 0562-97-0044
学級数：3　生徒数：73人
H　P：http://www.seijoh-jr.com/

地域創生プロジェクト～6次産業化を通して～

はじめに

本校は、創立以来自然体験研修を実施している。当初は、体験重視の活動で研修地の方々の協力で漁村体験などを実施していた。しかし、近年はこの行事を「主体的・対話的で深い学び」につながる実践的体験研修にしきれていないという思いが教員にあった。

そこで、本校で進めている持続可能な開発のための教育（ESD）の理念を自然体験研修に導入した。「地域創生」という視点を取り入れ行事全体をリニューアルした。その目的を「校外での体験活動を通じて課題解決型の探究活動に主体的・協働的に取り組む力を養う」と定めた。地域にどのような貢献ができるかを考え行動する取組を通して、生徒たちの主体的で協働的な態度の育成を目指した。

実践内容❶「バウムクーヘン大作戦2018」

ねらい：特産品の新開発によるSDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」の達成

本校では、探究活動の全体テーマを「地域創生」としている。例えば、自然体験研修ではその趣旨を体験型活動から課題解決型の探究活動へと切り替え「地域創生」のための提言活動に取り組んでいる。

本校の自然体験研修は福井県三方郡美浜町で実施している。2016年度は、地元の特産品である「へしこ」を取り上げ、新しいメニュー作りによる新たな美浜町の魅力づくりを提言した。翌2017年度は、探究活動に「美浜創生総合戦略」という名称を付け、より一層具体的な提言ができるよう工夫した。過疎化に悩む美浜町へ人を呼び込むために「美浜美景マラソン」を企画し提言した。

2018年度には、探究活動にSDGsの達成という視点を新たに導入した。SDGs目標11の達成を意識し地域の持続可能な発展のための提言作成に取り組んだ。その中で、生徒たちが自然体験研修で苗付けしたサツマイモを活用して、「へしこ」に代わる新しい名物を作ることを着想した。本校の卒業生で洋菓子店を営む先輩から助言をもらい、サツマイモを使ったバウムクーヘン作りに挑戦した。サツマイモ農家の方や、サツマイモを粉にする加工工場の方、バウムクーヘンを作るパティシエの方など、様々な人たちと話合いを重ね、意見を交換し、試作品完成までこぎつけた。校内外で実施した3度の試食会を経て、ついにサツマイモバウムクーヘンを完成させた。その後、パッケージまで考え一つの商品として完成させて、美浜町産業祭にて販売した。地元の方々に好評でサツマイモバウムクーヘンを完売することができた。

美浜町での提言の様子

成　果

地域が抱える課題の分析や解決に向けた探究活動を通して、生徒たちは地域や年齢の異なる様々な人々と話合いを重ね深く関わった。その結果、相手に説明し理解してもらうための表現力を向上させることができた。また、美浜町に貢献できたという思いから自己肯定感を高めることができた。

実践内容❷

「CONNECT2019大作戦」

ねらい：６次産業化によるSDGs目標８「働きがいも経済成長も」の達成

昨年度の「バウムクーヘン大作戦2018」の活動後、様々な活動に取り組んでいた生徒たちは、その中で「６次産業化」という言葉と出会った。「６次産業化」とは、「生産」の一次産業と、「加工」の二次産業、そして「販売」の三次産業を一体的に推進して、農山漁村の豊かな地域資源を活用し新たな付加価値を生み出す取組のことである。生徒たちは、「バウムクーヘン大作戦2018」で取り組んだサツマイモの生産・加工、バウムクーヘン作りと販売が正にこの「６次産業化」そのものだということに気が付いた。その後は「６次産業化」をキーワードにして今後の活動の方向性を考えた。

2019年度の探究活動では、「バウムクーヘン大作戦2018」で生徒たちが行った取組を、地元美浜町で６次産業として定着させることを目指した。生徒たちはこの活動を「CONNECT2019大作戦」と名付けた。それはサツマイモバウムクーヘンを軸にして様々な人やモノをつなげていき美浜町に新しい産業を興そうと考えたからだ。この「CONNECT2019大作戦」を実現可能な事業へと練り上げ、美浜町へ提言することを探究活動の目的にした。

生徒たちはまず事業の組織づくりから考えた。６次産業化の主体となる新会社「LAKULAKUグループ」を設立し、その下に、生産部門、加工部門、販売部門をそれぞれ組織する。生産部門はもともと美浜町でサツマイモ栽培を手掛けている「新庄わいわい楽舎」に事業委託する。加工部門は、サツマイモの加工工場建設から始める。「空き家バンク」で調査し、国道に近く水の確保が可能な工場建設用地を美浜町内で見付けることができた。成功のカギとなる販売部門では、まず美浜町の情報サイトをインターネット上に立ち上げ、美浜町の情報とともにサツマイモバウムクーヘンを通信販売していく方針を立てた。更には、美浜町内で喫茶店を運営し、付加価値を付けて販売促進につなげることも提言した。美浜町内の空き家を改築して、新しいお洒落（しゃれ）な人気スポットに育てる計画を立てた。この店舗運営には「バウムクーヘン大作戦2018」でお世話になった洋菓子店にアドバイスを受けることも考えた。

完成したサツマイモバウムクーヘン

今年度の自然体験研修中にこの６次産業化の提言を行った。更に生徒たちは農林水産省に６次産業化に対して補助金を交付する制度があることを調べて提言の中に織り込んだ。その後、星城中学校と美浜町が事業に関する協定書に調印した。この秋には100個のサツマイモバウムクーヘンが完成し、美浜町産業祭にて完売することができた。生徒たちの２年間に及ぶ探究活動が事業として動き始めた。

美浜町産業祭での販売の様子

成 果

SDGs目標８「働きがいも経済成長も」の達成を意識して取り組んだ。今回、生徒たちが一番苦労したのは、自分たちの発想と持続可能な事業運営との折り合いをどのようにつけていくかという点であった。現実的な問題にぶつかったときには、粘り強く考える。そんな思考力と判断力を伸ばすことができた。

おわりに

リニューアルした自然体験研修では、生徒たちが「地域」とより深く関わることができている。その取組を通して①問題を発見し現状を把握する力、②情報を収集分析し問題の本質を突き止める力、③解決方法を考え、それを表現する力を伸ばすことができている。意欲を高めた生徒たちは、学校行事だけでなく学校生活全般において積極的に活動できていると感じる。

現在、生徒たちは２年間の探究活動の手法や成果を本校の地元豊明市に生かせるように考え始めている。公立中学校と比べると地元とのつながりが弱い私立中学校において、生徒たちの地域貢献に向けての意識が変わってきたことは大きな収穫だと考える。

環境 | **国際理解** | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | **その他**

愛知県立みあい特別支援学校

創　立：2009年
住　所：〒444-0802 岡崎市美合町並松1-51
連絡先：TEL 0564-57-0013　FAX 0564-53-0034
学級数：54　児童生徒数：297人
H　P：http://www.miai-sh.aichi-c.ed.jp

ESDとICTでつながる社会、ひろがる心

はじめに

本校は、岡崎市と幸田町の知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校として2009年に開校した。今年度開校11年目の新しい学校である。2014年にユネスコスクールに加盟し、障害のある人もない人も共に尊重される社会の実現に向け、本校のテーマ「共生社会の実現」を具現化するために、「共に生きる」という観点から、児童生徒が家庭や地域の人々とのコミュニケーションを広げる機会を積極的に設定し、児童生徒の発達段階と生活年齢を考慮した学習活動を実践している。主な活動内容を①「自分の力を発揮する活動」②「社会に参加する活動」③「社会に役立つ活動」の三つに分類し、活動に取り組んでいる。

実践内容❶「ユニクロ／届けよう服のチカラプロジェクト」

ねらい：全校児童生徒、保護者、職員、学校全体ワンチームで取り組む！

児童生徒がリサイクル活動について関心をもつきっかけとすること、自分たちにもできる社会貢献活動があることに気付くこと、社会に役立つ活動を通して自己肯定感や自己有用感を高めることをねらいに「ユニクロ」が企画する「届けよう服のチカラプロジェクト」に参加している。高等部の生徒全員でユニクロ社員による出張授業を聞き、服のもつ力や服がなくて本当に困っている人たちのことを学んだ。授業後、生徒からは「こんな服は持ってきていいですか。」など回収に意欲的な発言や「服が一着しかないなんてかわいそう」などの発言があった。その後、高等部生徒会役員の生徒が中心となり、全校集会で児童生徒に服の回収を呼び掛けたり、保護者に文書で協力を呼び掛けたりした。回収箱には毎日のように服が集まり、集まったものは生徒会役員が昼休みなどを利用して仕分けたり畳んだりした。生徒は多くの服が集まることに驚いた様子であった。また、自分たちが声を上げれば協力してくれる人がいるということを知る貴重な体験になった。7月から11月までのわずかな期間だったが、多くの方々が協力してくださり段ボール13箱分の服を送ることができた。

回収した服の仕分け作業

成果
① 児童生徒がリサイクル活動に興味をもつきっかけになった。
② 多くの服を集めることができ、達成感を感じられた。
③ 学校全体で一つのことに取り組めた。

実践内容❷
「学校間交流」

ねらい：遊びを通して互いを知り、仲を深める。

笑顔でつながる友達の輪

小学部では、近隣の小学校との交流を毎年行っている。今年度は、相手校の３年生と本校の全児童が年２回の交流を行った。事前学習で互いのことを知るために、自己紹介カードを作成して交換したり、当日は、ペアを作って活動したりすることで、仲を深められるように工夫をした。主な活動内容は、グループごとに自己紹介をし、互いに考えたゲームや遊びである。その中でも、相手校の児童が考えてきてくれた出し物を見たり、手作りのプレゼントをもらったりしてうれしそうな表情を浮かべている児童が多くいた。また、ゲームの中で、名前を呼ばれたり、優しく手をつないだりすることで、普段一緒に過ごしていなくても、安心して共に楽しむことができていた。終了後には、「たのしかったよ。またあそぼうね。」などの手紙を書き、次の交流を楽しみにしている様子であった。

成 果
① 同じ地域に住んでいる同世代の仲間と出会えた。
② 遊びを通して互いのことを知り、一緒に活動を楽しむことができた。
③ 次回会えることを楽しみにする言動が見られた。

実践内容❸
「ふれあいロード整備交流」

ねらい：社会の一員として活動する素地やコミュニケーション能力を高める。

雨にもマケズ草にもマケズ虫にもマケズ

本校西側にある花壇を地域のボランティアの方と一緒に整備している。地域の方と協力して整備をすることで社会の一員として活動する意識やコミュニケーション能力を高めたり、花壇をきれいにすることで達成感や充実感を味わったりすることをねらいとしている。また、地域の方にとっては学校や生徒のことを直接知っていただける良い機会となっている。高等部１年生清掃緑化班の生徒６名が15名のボランティアの方と月に１回程度作業学習の時間を利用して花壇の草取りや石拾い、花の手入れなどに汗を流した。当初生徒は会話がぎこちなかったが、何度も顔を合わせることで自分から挨拶ができるようになり、会話が増えた。花壇がきれいになるとともに、生徒の社会性を広げられるとても良い実践となった。ボランティアの方々には本当に感謝している。

成 果
① 花壇がきれいになった。
② 地域の方と関わりをもてた。
③ 生徒のコミュニケーション能力が高まった。
④ 地域の方に学校や生徒を知っていただく機会となった。

おわりに

本校のESD活動は、生徒たちにとっては「自分の力を発揮する活動」に取り組むことによって「社会のルールやマナーを習得する」、「社会に参加する活動」に取り組むことによって「コミュニケーション能力を高める」、「社会に役立つ活動」に取り組むことによって「自己有用感を高める」ことができていると感じている。そして地域の方々にとっては、障害がある児童生徒や学校への理解を深める良い機会となっている。今後も活動を継続し、障害がある児童生徒が人や地域、社会とつながることで「共生社会の実現」につなげていきたい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

国立大学法人愛知教育大学

創　立：1949年
住　所：〒448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢1
連絡先：TEL 0566-26-2716　FAX 0566-95-0552
学生数：教育学部 3,810人　大学院 312人　専攻科 34人
H　P：https://www.aichi-edu.ac.jp/

SDGsを達成できる教育人材の育成

はじめに

愛知教育大学は、広域の拠点的役割を果たす教育大学として、人間理解と真理探究に努め、教育が直面する現代的課題への対応力を有し、子供たちの未来を開くことができる豊かな人間性と確かな実践力を身に付けた専門職業人の養成を使命としています。21世紀を迎え、持続可能な社会を生き抜く子供たちを育てるために、教育的専門性のみならず、地域の社会的側面の専門性も兼ね備え、地域で生きる資質・能力をもって社会で活躍できる人材を目指し、地域や社会と連携した活動に取り組んでいます。

実践内容❶
「地元企業が抱える地域課題を学生の協働で解決」

ねらい：企業が提示する研究課題を解決し、成果を発信する中で、課題解決の実践力を育成する。

これからの教員は、新しい学習指導要領が目指す社会に開かれた教育課程を実現することが求められる。いろいろな学外との連携も必要となる。「かがやけ☆あいちサスティナ研究所」は、愛知県が進める事業であり、地元企業が提示する研究課題を大学生がチームを組んで、解決策を模索し、その成果を発信するものである。過去、毎年、本学の学生が研究員として参加し、地域の企業が抱える環境に関する課題解決を通して、協働・実践力の育成に役立っている。

本年度は、２名の学部生が「伊藤園」と「東レ」の研究員として参加した。「伊藤園」は、「お茶で愛知を美しく。」環境活動を広げる方策を検討する課題、「東レ」は、東レのSDGsの取組を子供たちに楽しく伝える授業を検討する課題が掲げられた。チームに所属した学生は他のメンバーとともに、それぞれの企業訪問やフィールドでの研究活動を行いながら、それぞれの課題を解決する提案をプレゼンテーションの形でまとめた。学生ながらの未熟さを認めつつも、学生ならではの視点でそれぞれ提案を行うことができた。また、この活動を通して教員としての視点や各専門領域の視点以外からの学びを通して、社会的なスキルも育成された。この研究所での活動を通して、各チームの課題だけでなく、全体として愛知県における環境問題や現状を把握することもできた。

伊藤園での企業研究活動セミナー

成果

地元企業が掲げる課題を、専門や所属の異なる大学生がチームとなり解決するプロセスを通して、企業の実践的な活動や地域の新たな側面や実践力を学生が学べている。今後の教員生活において、総合的な学習の時間や地域を生かす教育活動に、その成果が発揮されていくことを期待している。

実践内容❷

「SDGsを簡単に理解させる教材の開発と実践」

ねらい：街づくりの活動を通して、SDGsが目指す17のゴールを子供や教員に理解してもらう。

2015年国連によりSDGsが採択された。日本でもSDGsを導入する企業が増え始め、2018年からはSDGs未来都市の選定により全国各地の自治体でSDGsを導入した取組が求められている。愛知県でも、「愛知県」「豊田市」「名古屋市」「豊橋市」が選定され、県内でのSDGsを意識した活動は今後、学校現場においても求められることとなる。そこで、SDGsとはどのようなものかについて、小学生以上を対象とした教材の開発を、理科教育講座の学部生が卒業研究のテーマとして取り組んでいる。企業や自治体ではかなり普及しているSDGsではあるが、まだまだ学校現場での認識は低い。そのため、児童生徒だけでなく、教員も含めてSDGsとは何か、SDGsを達成するためにどのようなことをしたら良いかを分かりやすく学べる教材を目指して開発を行った。開発した教材は、街づくりをベースに、仮想の土地に様々な建物パーツをはめ込んで街を完成させ、その街がどのようなSDGsに貢献しているかを確認できる教材である。愛知県の環境イベントや愛知県ユネスコスクール交流会での試行を基に修正を加え、開発した教材を本学附属名古屋小学校、岡崎小学校において授業実践を行い、一定の成果を得ることができた。次年度以降、県内を中心に学校現場での普及拡散に努め、学校現場におけるSDGsの理解を推進していきたい。

街づくり活動の様子

とある班の街づくり活動の結果

成 果

仮想の街づくりという活動を通して、SDGsとは、また身近な施設や建物がどのようにSDGsに貢献しているかを理解させることが可能となった。この活動をきっかけとして、子供たちが身近な社会について考えるきっかけや学ぶ意欲につなげることができた。今後県内への普及を検討していきたい。

おわりに

2019年度、本学は創立70周年を迎えた。次年度から新しい教育課程が始まる。持続可能な社会を生き抜く子供たちが身に付けなければいけない資質・能力を育成するために、教員自身も様々な資質・能力を身に付ける必要がある。本学では、ここに紹介した以外にもAUE学生チャレンジプログラムやAUEパートナーシップ団体の活動など、学生が自発的にそれぞれが抱える課題を解決する活動を行っている。各研究室においても、企業や自治体と連携した取組を行っている。地元で活躍する教員として、学力や児童生徒理解のみならず、地域活動にも貢献することができる実践力を備えてほしいと考えている。

愛知県ユネスコスクール交流会

全国一の規模を誇る愛知県のユネスコスクールの支援とESD（持続可能な開発のための教育）活動の広がりをねらいとして、ESD活動やSDGsに関心のある小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学の、児童、生徒、学生、教職員、行政、団体が集う交流会を開催しました。ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会づくりの重要性について未来を担う子供たちが学び合いました。ここに集う子供たちの輝く笑顔は、私たちの心にESD活動の大切さと未来への希望を届けてくれました。

当日は、ユネスコスクールを中心とした小学校から高校までの児童生徒や教職員等約180名が集い、活動発表や意見交換を行いました。

日 時　2019年10月19日（土）正午から15時
会 場　ウィルあいち　3F大会議室　ほか
主 催　愛知県教育委員会
後 援　日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、中部ESD拠点協議会、ESDコンソーシアム愛知

ポスターセッション

① 12:00～12:15	**豊橋市立小沢（おざわ）小学校** 「ふるさと小沢を味わう」 ふるさと小沢の名産「小島梨」についての調べ学習と、地域ボランティアとともに行う栽培活動についての報告。
	岡崎市立新香山（しんかやま）中学校 「エネルギー問題について考え、自然環境との共生を目指す」 「未来の人たちの、豊かな暮らしも守る」エネルギーを中心に、持続可能な社会の創造を目指して取り組んだ環境学習の報告。
	名古屋市立北（きた）高等学校 「SDGs取り組みへのホールスクールアプローチ」 ユネスコスクール１年目の北高校で、本年度発足したユネスコ委員会によるホールスクールアプローチを紹介。
② 12:15～12:30	**豊橋市立五並（いなみ）中学校** 「守れ！私たちの表浜海岸」 アカウミガメが来る表浜の自然を守るために自分たちに何ができるかを追求した活動を報告。
	名古屋市立山田（やまだ）高等学校 「『防災広報活動』を中心とした委員会活動」 「いのちを守る」広報活動（防災新聞の発行）を柱とした防災委員会の活動報告。
12:30～12:40	**質疑応答**

参加申込校（順不同）

名古屋市立八熊小学校	豊橋市立五並中学校	愛知県立豊田東高等学校
岩倉市立岩倉東小学校	豊田市立朝日丘中学校	愛知県立豊橋特別支援学校
あま市立甚目寺小学校	豊田市立藤岡南中学校	豊橋市立くすのき特別支援学校
蟹江町立蟹江小学校	愛知県立愛知総合工科高等学校	名古屋市立北高等学校
豊橋市立大崎小学校	愛知県立松蔭高等学校	名古屋市立山田高等学校
豊橋市立小沢小学校	愛知県立天白高等学校	名古屋石田学園 星城中学校
豊橋市立富士見小学校	愛知県立春日井東高等学校	名古屋経済大学市邨高等学校
豊橋市立嵩山小学校	愛知県立一宮北高等学校	中部大学第一高等学校
津島市立暁中学校	愛知県立津島北高等学校	愛知教育大学
岡崎市立新香山中学校	愛知県立佐屋高等学校	名古屋市立大学

交流会プログラム

12:45	**開会行事**（主催者挨拶）		
会場移動・休憩			
12:55〜13:40	**分科会**（ユネスコスクール活動発表）		
	小学校分科会〈会議室４〉	**豊橋市立富士見小学校** 「広めたい！ふるさと富士見のひみつ」 ４年生が行った「郷土を愛する心情を育成する学習」についての実践報告。	
		あま市立甚目寺小学校 「ふるさと甚目寺 〜かかわる つたえる つながる〜」 地域の「人」「もの」「こと」との関わりを生かした地域学習についての報告。	
		ディスカッション ファシリテーター：一般社団法人中部SDGs推進センター 副代表 百瀬 則子 氏	
	中学校高等学校分科会〈大会議室〉	**名古屋石田学園 星城中学校** 「地域創生プロジェクトの提言と活動 〜６次産業化を通して〜」 中学２年生が行ってきた福井県美浜町のESD地域創生活動の報告。	
		中部大学第一高等学校 「SDGsとCOOL CHOICE」 SDGsに関する学びの全体概要とESD部と日進市の連携活動「COOL CHOICE」についての報告。	
		ディスカッション ファシリテーター：名古屋市立大学 理事 副学長 伊藤 恭彦 氏 一般社団法人SDGsコミュニティ 代表理事 新海 洋子 氏	
13:40〜14:10	**ワークショップ**（順不同）		
	〈会議室６〉	**あいちの未来クリエイト部 中部大学第一高等学校** 「プロジェクトU 〜絶滅危惧種ウシモツゴの飼育・繁殖・放流〜」 絶滅危惧種であるウシモツゴの生態が絶妙なバランスによって保たれていることを感じられるボードゲーム体験。	
		愛知教育大学 理科教育講座 大鹿研究室 「SDGsを達成するまちづくり」 決められた区域に建物や施設を配置し、完成した街から街のSDGsの達成度等を理解する活動。	
	〈会議室７〉	**独立行政法人 国際協力機構中部センター（JICA中部）** 「JICA事業紹介 ー途上国の教育現場からー」 途上国（トンガ王国、パラグアイ共和国）の教育の様子を画像を見ながらお話します。	
		有限会社フェアトレーディング／フェアビーンズコーヒー 「生産者を守るフェアトレードの仕組み 〜コーヒー危機における中米のコーヒー生産現場を例に〜」 コーヒー生産と貧困問題を学び、生産者の声を共有しながら、フェアトレードと持続可能性について考察します。	
14:10〜14:50	**基調講演** **「終わりなき侵略者との闘い 〜増え続ける外来生物〜」** 講師 五箇 公一 氏（保全生態学者、農学博士）		
14:50〜15:00	**全体ディスカッション〜まとめ** 進行 五箇 公一 氏（保全生態学者、農学博士） 各分科会ファシリテーター		

当日の参加者の声

今日の交流会についての感想

中　学　生	今回初めて参加しました。初めて学んだことも多く、とてもためになりました。自分の考えだけではなく、いろいろな人の視点から見ることができ、良かったです。また参加したいと思いました。
中　学　生	環境や貧困などの問題は他人事のように思っていたが、我々にも危機が迫っていることを知った。
高　校　生	自分の知らないことを楽しく学べて、とてもいい体験になった。
高　校　生	他の学校の活動を知ることができて、参考になったし、視野が広がりました。
大　学　生	交流会を通して、他校がSDGsにどのように関わってきたのかなどが分かり、良かったです。参考になった点が幾つかありましたので、帰ったら話して自分たちのものにしたいです。
大　学　生	子供たちの生き生きした姿が見受けられ、ESDに取り組むモチベーションが高まりました。
教　職　員	本校で行っている地域の特性を生かした実践活動だけでなく、他の地域・学校で行っていることの発表を聞けて参考になった。
保護者等	質疑応答の時間に手を上げる聴衆が少なかったのが残念だった。ポスターセッションは、調べてきたことの発表に終始していたので、聴衆とセッションを試みるなら、調べた内容の内で解決できなかった部分など、他のアイデアについて提議して意見をもらったらどうだろう？ ワークショップに子供たちは楽しそうに参加していました。
一般参加者	同じESDというものに向かって活動をしている団体や人の話を聞くことができ、刺激的な会になりました。

ユネスコスクールやESDの活動の充実のために、必要だと思うこと

中　学　生	小さな頃からコツコツやることだと思う。
中　学　生	今日のことに関心をもち、たくさんの人に広めること。
高　校　生	向上心、好奇心をもち、より多くの交流を図ることだと思う。
高　校　生	このような交流会で人と関わることが大切だと改めて感じたので、もっと僅かなことからでもいろいろな人たちと関わって話ができたらいいと思いました。
教　職　員	一口にESDといっても、様々な切り口があって、私たちにできることはたくさんあるように感じました。こうした内容をより多くの人に広めていくことの必要性を感じました。
教　職　員	環境問題や防災など、どんなことでも少しでも関心をもつことが大切だと思います。ユネスコスクールがSDGsの発信校として情報を発信したいと思いました。
教　職　員	事実を正確に知り、それを伝え、自分事として話し合う機会を多くもつこと。多くの情報があふれていて、何が事実かを正確につかむことが難しいと感じる。これを克服する必要がある。
保護者等	ESDも１人では難しいがグループ、団体でやればできることが多いと感じました。小学生も、中学生も、社会経験が少ないのに、よくニーズや利便性にまで気を配って研究していると思い、先生方には、たくさん励まして、益々子供なりの意見が出せる場をつくっていただきたいと思いました。
一般参加者	もっと多くの学校がこのような交流会に参加すること、学校同士のつながりをより強固にすることが必要だと思いました。

ユネスコスクール活動事例集　第7集

令和2年3月発行

愛知県教育委員会生涯学習課
〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電　　話 052-954-6749（ダイヤルイン）
ファックス 052-954-6962